

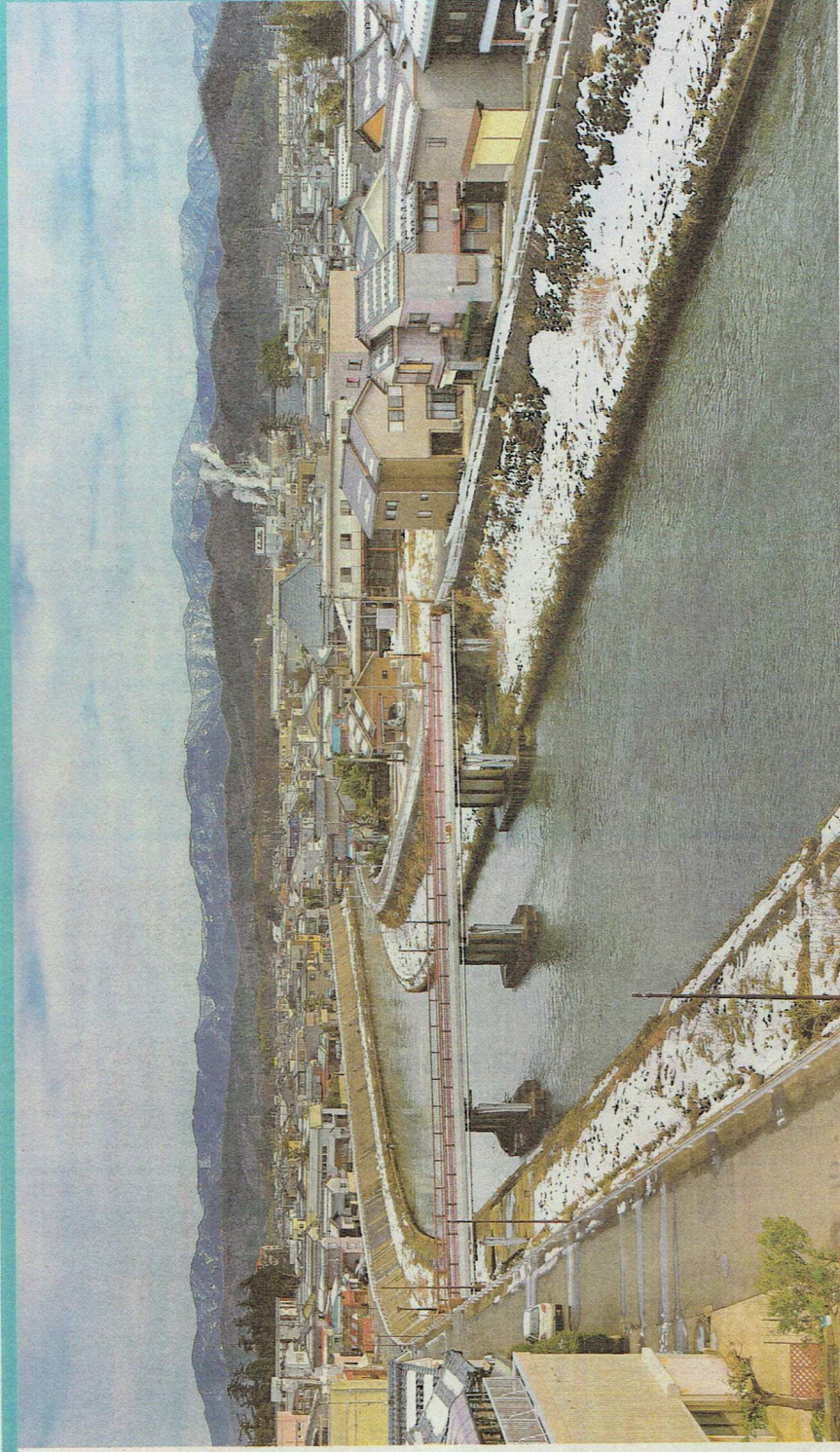


身近な自然である川
わたしたちはこの流れとともに
さまざまな物語を育んできました

竹田川

撮影場所：あわら市

九頭竜川の支流で、福井と石川の県境、坂井市丸岡町の丈嶺山(たけくらばやま・標高1045m)を水源とする一級河川。龍ヶ鼻ダムを経て坂井市を北西方向に曲折しながら北に流れ、あわら市を東西に貫流、河口付近(坂井市三国町汐見)で九頭竜川に合流し、日本海に注ぐ。延長41.9km、流域面積は208.6平方km。宮谷川のほか、兵庫川、熊坂川、権世川、田島川、五味川などの支流がある。

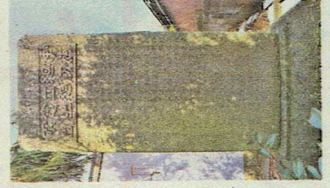


水運がもたらした富と繁栄

竹田川は流域に大きな富と繁栄をもたらした「恵みの川」である。その入り口となったのは、川縁に設けられた階段状の「河戸」と呼ばれる船着き場。旧金津市街には13カ所の河戸があり、ここから北前船の寄港地・三国へと物資が送り出され運び込まれた。

金津地区では古くから穀物が重要な産業で、金津の地名は「鉄(金)を集散する川港(津)」を意味する。竹田川による鉄の輸送は街に富をもたらし、年貢米や海産物、薪炭などの生活必需品が運ばれた。もちろん野菜や衣類などを売って生活の場としての河戸も確立され、すべての住民が川の恩恵を享受して暮らしていたのだ。

しかし1897年(明治30年)の北陸本線金津駅完成により、物資輸送の手段は水運から陸運へと大きく舵を切られる。この変革期に、水陸荷役に携わる「金津仲士」たちは新たな物流組織をつくろうと、組合を設立。彼らは三国港から船で物資を選び、列車に積み込む作業を請け負うことになったが、1911年(明治44



竹田川の橋に建つ金津仲士組合を顕彰する石碑

年)の国鉄三国線開通により活躍の場は激減する。生活のための河戸も不要になり、いつしかすべて姿を消してしまっ

た。JR芦原温泉駅近くの竹田川のほとりに、金津仲士組合の顕彰碑がある。地区の寺の隣で眠っていたものを、地元有志によりここに据えられたのだと、ふるさと語ろう会会長の牧田孝男さんが教えてくれた。街の中央を流れ、まちづくりの起点となってきた竹田川。北陸新幹線開通を控えた今だからこそ、川の恵みで生きていた時代を忘れてはならないと牧田さんは言う。

